

## 主 題：より多くの人々が救われるために

聖書箇所：コリント人への手紙第一 9章19-27節

「私たちの愛する家族や友人が救われてほしい…」、この思いは本当の救いを知った者、クリスチャンなら、すべての者に共通するものでしょう。では、そのために、私たちは何をどのようにしていけば良いのでしょうか？一人でも多くの人を救いに導くためにパウロがしたこととはどのようなことでしょうか？

## ☆一人でも多くの人を救いに導くために、パウロがしたこととは？

今日の聖書箇所は、そのことについて、私たちに必要なパウロからの勧めであり、彼自身の証しでもあります。というのは、私たちはもしかすると「この神様のことを伝えたい…」とか、「伝道すべきだ…」とか、「この人たちに救われてほしい…」ということを考えてはいても、「では具体的に何をどうすれば良いのか？」というところでつまづいてしまっているのかもしれないからです。今日、私たちがこの箇所から学んで行きたいことは、「多くの人を救いに導いたあのパウロが、少しでも多くの人たちを救いに導くために、どのように考え行動していたのか？」ということです。それを学ぶことによって、私たちも、もっと多くの人たちに対して、効果的に福音を伝えることができるようになることを願い、そして、何よりも、私たちが与えられた目的というものをしっかり見据えて生きていくことができるようになることを願います。

1. 自らが仕える者となった 19-22節

19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。

20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。

21 律法を持たない人々に対しては、——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが、——律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。

22 弱い人々には、弱者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。

## ●「奴隷となりました」（19節）とは、どのようなことを意味するのでしょうか？

ここの箇所を見ると、パウロが少しでも多くの人たちが救われるために考え、そして、実践したことの第1番目が「自らが人々に仕える者となった」ということが分かります。というのは、19節でパウロは「奴隷となりました」ということばを使っていますが、実はこのことばは「奴隷にする」とか「隷属させる」、つまり「仕える」ということの強い表現なのです。当然、ここでパウロは、自分が「実際の身分としての奴隷」になったということをお話している訳ではありません。また、自分の救われてほしい人の言いなりになったということをお話している訳でもありません。ここでパウロが言わんとしていることは、「その人の必要を満たそうとした」とか、あるいは、「その人の必要を満たすために自らが犠牲を払った」ということなのです。どうしてそのように分かるのかと言うと、例えば、ある時、イエスがこのようなことを言われました。マルコ10：45「**人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。**」。ここでイエスは、ご自分の場合の「仕える」ということの実践についてお話しているのです。多くの人たちの救いのために、本当の必要に応えるためにご自分のいのちを犠牲にする、つまり、罪の贖いのために、自ら進んで十字架に磔になるということについて話しておられるのです。

また、パウロは、このイエスの十字架について、ピリピ書でこのように説明しています。ピリピ2：6-8「**キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。**」と、つまり、イエスがご自分の身をもって教えてください、また、パウロも理解していたこととして、「人々に仕える」ということはその人たちの本当の必要を満たして行くということであり、そのためには犠牲を払うことさえいとわないということだったのです。そう考えると、私たちもまだ救いに与っておられない人たちのために、「その人たちには何が本当に必要なのか？」ということをお話、私たちに側で真剣に考える必要があります。なぜなら、その人たちに尋ねても、その人たちはこのように言うかもしれません。「私の一番の必要は経済的な問題の解決だ」、また、別の人は「健康上の問題です」と。実際、イエスが地上におられた時もそうだったので、人々には神との和解が必要であり、何より罪の赦しが必要であったのに、目先の経済的な問題や、病

気やケガからの回復のことが自分たちにとっては一番必要だと信じていたのです。

ですから、私たちはそのような人たちに語り続けなければいけないし、祈り続けなければいけないのです。その人たちが、本当の必要に気付いてくださるようにと…。確かに、ここにおられる皆さんはそのようなことをもう既に実行されたことと思います。祈り続けることは当然として、一度か二度、いや、もっとそれ以上に、実際にお話しになられたでしょう。でも、それが拒まれたからといって、私たちは諦める訳にはいかないのです。何度も同じことを語り続けることが最善でなくても、何か別の方法で、何とかして分かってもらうための努力が必要です。実は、それこそが「仕える」ということでもあるのです。

Ⅰペテロ3：1-2に「同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです。2それは、あなたがたの、神を恐れかしこむ清い生き方を彼らが見るからです。」とあるように、語り続けることができなくても、私たちにはできることがあるのです。大切なことは、私たちの「神を恐れかしこむ清い生き方」を、どのようにして周りの人たちに理解していただくかということなのです。私たちはいつの間にか、いろいろな愚痴や陰口を周りにこぼしてしまっていないでしょうか？また、神ではなく、別のものを恐れたり、優先したりするような生活を送ってはいないでしょうか？清くない生活を送ってはいないでしょうか？また、いつの間にか、無言でいること（＝直接的には、福音を語らないでいること）が当たり前ようになってしまっていて、福音を語るチャンスをみすみす見過ごしてしまっていないでしょうか？大切なことは、私たちが無言で仕え続けることではなく、相手が救われることです。

(1) 自らの**選択**で仕えた。

19節に「私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。」とあるように、確かに、パウロには自由がありました。すぐ直前の箇所からも学んだように、彼には自由だけでなく、それ以上に、特別な使徒という権威が与えられていたのです。しかし、彼は、自らの選択で、進んで人々に仕える者となったのです。私たち人間は、往々にして、人に仕えることよりも、人から仕えられようとしています。12弟子たちもそうでした。神でありながら、すべての人に仕えようとしておられたイエスのもとで、彼らは自分たちの中で誰が一番偉いかなどということを考えていたのです（マタイ20：17-28；ルカ22：17-27）。また、罪を犯す前のアダムは、神に対して従順に仕えていましたが、罪を持ってしまった後のアダムは、神に逆らうようになってしまいました（＝神の声を聞いて隠れたこと、神に言い訳し、神を責めた）。そして、その妻エバも、罪を犯す以前は神と夫アダムに従順であったのに、罪を犯してからは、神にもアダムにも逆らう者となってしまったのです。

確かに、私たちの内には自分こそが一番でありたいと思う気持ちがあり、「人に仕えてもらいたい」という思いがあります。私たちはそのような思いに身を任せ、人が自分の思い通りになってくれないことで、怒ったり、他人を責めたりすることもできます。しかし、そんな時に、是非、イエスの模範を思い起こして冷静になって考えてみてほしいのです。「一体、自分とは何者なのか？」ということ…。「果たして、本当に聖書を見た時、自分は人に愛されるべき、また、人に仕えられるべき存在なのかどうか？」ということ…。また、それと同時に、「一体、自分は何を一番に優先したいのか？」ということを考えるべきではないでしょうか。その人が救われること、または、成長してくれることを第一に願うのか？それとも、自分が仕えられることを望むのか？怒りがあるその時に、その怒りの理由を考えてみてください。このことを受け入れられるかどうかで、私たちの、本当の優先順位が分かるのではないのでしょうか。

(2) **積極的**に仕えた。

パウロは、自らの選択で仕える者となりました。また、彼はそれだけではなく、積極的に仕えることを心掛けたのです。19節の後、20節に「ユダヤ人」や「律法の下にある人々」、21節の「律法を持たない人々」、22節に「弱い人々」と続く訳です。22節の最後の部分には「それは、何とかして、幾人かでも救うためです。」とあります。パウロはただ単に「人々の必要のために仕えることを選択した」というのだけではありません。彼は、それこそが人々に福音を伝え、救いに導くための最善の方法であると考えたが故に、積極的に、そして必死になって、仕えることを実践し続けたのです。「人に仕える」というのは、ある時だけ、少しの間だけ実践しようとするならできます。しかし、それを継続的に、また、積極的に行ない続けるというのは容易いものではありません。彼はそれを実践し続けたのです。だからこそ、パウロを通して、多くの人たちが救われたのでしょう。

(3) **すべての**人に対して仕えた。

パウロは「仕える」という選択を、自らの選択で、また、積極的に行なっただけではありません。彼はその選択を、すべての人に対して実践したのです。19節「私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。」、また22節「弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。」

とある通りです。彼は人々に福音を語る時「この人は救われてほしい」とか、「この人には福音を語りたい」というようなえり好みをしなかったのです。相手が同胞であるユダヤ人であろうなかろうと、どんな環境にいる人であろうと、どんな人物であろうと、人が救われるためにはえり好みをしないで、どんな人にも仕え、福音を語っていったのです。彼にとって、伝道の対象とは、自分の愛する家族や友人たちだけではなかったのです。

## 2. 目的をもって、すべてのことを行なっていた 23節

少しでも多くの人たちが救われるために、パウロが考え実践したことの第2番目、それは、しっかりと目的を持ってすべてのことを行なっていたということです。私たちも、同じように、しっかりと目的を持って、すべてのことを考え、行動していかないと、いつの間にか、表面的な行動ばかりに焦点が当てられてしまっていることがあるのではないのでしょうか？

### (1) **福音**のため

23節「**私はすべてのことを、福音のためにしています。**」、パウロはいつも、しっかりと目的を持って考え、行動していました。彼は、すべてのことを福音のため、つまり、少しでも福音が前進することを考え、より多くの人たちが救われるために行動していたのです。パウロの福音宣教に関連して、こんなエピソードがあります。ある時に、パウロはキリストの語っておられた福音とは違う「ほかの福音」（ガラテヤ1：6-9）が語られた時、激しく憤りました。それは、彼らの語っていた福音が違うメッセージ（＝行ないによる救い）であったからでした。しかし、ピリピ人への手紙1章を見ると、悪い動機で（＝パウロを苦しめようとして）福音が語られていることに関しては、大きな問題としては考えていないようでした。つまり、ここでもパウロの優先事項というのは、「正しい福音」であり、「人々の救い」であったということがはっきり見て取れます。実に、彼の態度は一貫しています。「すべてのことを」、パウロは「福音のために」、人々の救いのために行なっていたのです。

### (2) **自分自身**のため

また、パウロはここで、実は、すべてのことが福音のためだけにしていたのではないということを話しています。23節に「**私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをもとに受ける者となるためなのです。**」とある通りです。パウロは、パウロ自身の祝福のため、つまり、自分自身のためにも、福音を語っていたのです。

### ●「福音の恵みをもとに受ける」とは？

では、ここに書かれている「**私も福音の恵みをもとに受ける者となるため**」とは、どのような意味なのでしょう？皆さんもご存じのように、聖書が教える「福音」、あるいは「救い」とは、ただ単に、私たちが死後のさばきに遭わないで済むというようなものではありません。私たちが今、神の守りの内に生かされていることも、神に導かれていることも、神に用いられることも、時には、問題を与えられ、私たちが苦しみを受けることさえも、神のご計画であり、私たちが成長させるために神がしてくださっていることであるなら、それらも救いの一部分であり、福音なのです。（神学的には、義認、聖化、栄化と言います）

ピリピ1：6に「**あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は強く信じているのです。**」とある通り、神は、私たちが救い出してくださっただけでなく、その後も、私たちをお守りくださり、完成へと導いてくださるのです。だから、パウロも、この後のピリピ2：12で「**そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いを達成してください。**」という表現をする訳です。そして、ピリピ3：12で「**私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。**」と、つまり、「いつの日にか神から与えられるはずの、完全というものを期待して歩んでいるんだ！」ということのパウロは強く訴えるのです。

ということは、私たちがより成長するために、また、より祝福を頂くためには、何をすべきなのでしょう？パウロはここではっきりと私たちに教えてくれています。それは伝道です。もし、私たちがこの部分を怠けたり、無視したりするならば、それは、神が私たちになそうとしてくださっている、大切な祝福の一部を放棄してしまっているということにならないでしょうか。以前、学んだように、この話の流れは、コリント教会から質問のあった「偶像に捧げられた肉を食べることに関しての質問」に対するパウロの返答の一部分です。このことを質問したコリント教会のメンバーは、「偶像に捧げられた肉を食べることが良いのか、それとも悪いのか？」ということに関して、パウロからの答えを期待していました。しかし、パウロの答えは、偶像に捧げられた肉を食べるか食べないかということではなく、もっと周囲に気を配りなさい、他人のつまずきとならないようにしなさいというものでした。Iコリント8：8-9「**8 しかし、私たちが神に近づけるのは食物ではありません。食べなくても損にはならないし、食べても益にはなりません。9 た**

だ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように、気をつけなさい。」とある通りです。

私たちが陥ってしまいがちなのは、目先の「このことを行なうのは、神様のみこころを損なうだろうか？これはどうだろうか？」と考え、神に対して、いつの間にか、消極的に従っているようになってしまうことです。しかし、そうではなく、「神様は私がこれを実行することを喜んでくださるんだ！」というような積極的な従順が必要なのではないのでしょうか？自分の生かされている目的をしっかりと覚え、神が喜ばれることを意識して、そのために邁進することが必要なのではないのでしょうか？例えば、友人と会うのも、「どうすれば、神様が喜んでくださるだろうか？何を話すことが、この人の救いに、また、成長や祝福につながるだろうか？」ということを考えて、私たちは行動できます。そのように私たちは、しっかりと、目的を持って、様々なことを、いや、すべてのことをなすべきなのです。そうする時に、間違いなく、私たちは変えられ、もっともっと、神に用いられる、そのような人物になることができるのではないのでしょうか。

### 3. 自己満足ではなく、神の目を意識していた 24-27節

最後に、どうすれば私たちはもっと多くの人たちを救いに導くことができるのか、その第3番目のポイント、それは、自己満足ではなく神の目を意識するということです。

**24 競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。**

**25 また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。**

**26 ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはしません。**

**27 私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。**

#### ●参加することに意義がある？

24節から、パウロはスポーツに例えて信仰の話が続いています。この箇所以外でも、スポーツのことがよく出てくる（Ⅱテモテ2:5；ピリピ3:14など）ことを考えると、パウロはスポーツが好きだったのかもかもしれません。しかし、私はどちらかという、スポーツは観ることばかりで余り実際には参加しないことが多いです。私にとってスポーツとは結果や勝負よりも「参加することに意義がある」というようなものです。しかし、注目すべきことは、ここでパウロはそのようなには教えていないということです。どんなに頑張っても、工夫してもほとんどすべてのスポーツでは、賞を受けることができるのはほんの一握りです。ここでパウロは「結果はいつでも良い」とは言っていません。「賞を受けられるように走りなさい」というのが彼の勧めです。「必ず賞を受けなさい」という教えではないですが「それを目標に頑張らなさい」ということです。

正直、私たちは自分で「これだけやっているから…」とか、「もう充分やった…」と考えてしまうことがあります。自分で勝手に納得して、自分で勝手に及第点を与えてしまうのです。しかし、パウロは、このⅠコリント4:3-4でも「しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるわけではありません。私をさばく方は主です。」と教え、私たち人間の評価で左右されないようにと言っています。彼が常に意識していたのは、神の目であり、神の評価でした。彼はそのことを常に覚え意識していたが故に、しっかりと目標が見えて、正しく生きることができたのです。私たちが気を付けなければいけないことは、「あの人が分かってくれないと…」などと考えて他人の評価や人の目を意識してしまうことです。

#### ●「獲得する」ということばを使った理由は？

今日の箇所、19-22節では何度も「獲得する」ということばが出ていました。これは「獲得する」という以外の意味では、「得る」とか「得をする」というように訳せることばですが、単純に考えると、これは奇妙な表現ではないのでしょうか？というのは、その人が信仰を持ってくれたからといって、その人が、自分の所有物となる訳ではありません。なぜパウロは、「人が救われる」ということを「獲得する」などと表現したのでしょうか？実は、みことばが教えることは、まだ、救われていない人たちは神を知らずにいるばかりか、神と和解できていない故に、悪魔に従っているということです。エペソ2:1-2でも「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の權威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。」と教える訳です。まだ、信仰を持っていない人たちは、その人が意識しようとして意識しまいと、結果として、悪魔に従って生きているのです。

「人が救われる」というのは、その悪魔のグループに属していた人が、神のグループに移ることでもあるのです。だから、ヨハネもⅠヨハネ3:8-10で「8 罪のうちを歩む者は、悪魔から出た者です。悪魔は初

めから罪を犯しているからです。神の子が現われたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。9 だれでも神から生まれた者は、罪のうちを歩みません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪のうちを歩むことができないのです。10 そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行なわない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」と語り、神のグループと悪魔のグループがあることを教えてくれています。その後、Iヨハネ3：14「私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。」というように、救いとは、その人が、悪魔のグループから、神様のグループに移ることもあるのです。また、パウロは、ローマ15：16で「それも私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです。」と語っています。私たちは神の祭司なのです（Iペテロ2：5，9）。

当時の祭司たちが神への捧げ物をささげたように、私たちも、異邦人、つまり、まだ救われていない人々を、聖い神が喜んでくださるような「聖なる」、また、「神に受け入れられる供え物」としてお捧げするのです。そのために、私たちは今、生かされているのです。そして、その務めを「聖霊」なる神がなしてくださるのです。どうぞ、そのことを忘れないで、毎日毎日を歩んで頂きたいと思えます。